

高齢者施設における間戸の再考

—安心感と見守りやすさを両立するデザインの検討—

建築学専攻

プロジェクトデザイン研究

DZ20662 ^{よしもと}吉本 ^き 冨希

指導教員 山代 悟

序章 はじめに**0-1. 研究背景**

現代の 1990 年代以降の高齢者施設の設計は、その課題を効率性から QOL、そして地域共生へと広げてきた。入居者と外部との接触を増やす一方で、入居者の能動的な活動や介護スタッフの安心できる働き方をどう維持・向上させるかが大きな課題となっている。こうした中、視線や動線を制御する窓・開口部といった「境界」には、安心感と社会性を調整する機能が期待されている。

0-2. 研究目的

現代の高齢者施設では、「開放性」と「安心感」を両立させる必要があり、そのための開口部の機能を理解することが重要である。本研究は、入居者、介護スタッフ、外部者との「見る／見られる」関係に焦点を当て、「間戸（まど）」を通じて、いかなる情報を受容し、その周辺でどのような生活行為が誘発されるかを明らかにすることを目的とする。

0-3. 既往研究

既往研究では、開口部の位置が入居者の視線や心理に与える影響が示されているが、地域社会との接続に関する知見は不十分である。そこで本研究では、施設内から外部境界までを含む面を「間戸（まど）」と再定義する。建具の開閉や家具の配置、物理的距離といった調整機能に着目し、入居者・スタッフ・外部者の三者間における「見る／見られる」関係の変容を明らかにする。

第 1 章 間戸の役割と定義**1-1. 高齢者施設における間戸の定義**

清家清は、日本の伝統的なファサードの特徴として「間戸」を強調し、それが単なる開口部や建具ではなく、空間を構成し境界を曖昧にする機能を持つと論じている。本研究では、この概念に基づき、空間を仕切る壁体において視線や身体の通過を制御するために設けられた部分全体を「間戸」と再定義する。具体的には、壁面に設けられた「開口」と、そこにはめ込まれた「建具（扉、内窓、窓等）」の総体を指す。これらを一つの「面」として捉えることで、境界における情報の透過性や身体的な接続性を評価する。

1-1-2. 4 つの空間における境界の分類

高齢者施設における利用者が生活する 4 つの空間「外界」「共用部」「居室」「中庭」に着目し、境界を 8 つに分類する。

	外界	共用部	居室	中庭
外界		○（共－外界）	○（居－外界）	○（中－外界）
共用部		○（共－共用部）	○（居－共用部）	○（中－共用部）
居室			○（居－居室）	○（中－居室）
中庭				

【表 1：境界の分類】

1-2. 間戸の役割に関する仮説設定

調査・分析を行う前に、高齢者施設における間戸が、入居者、介護スタッフ、外部者にとってどのような機能を果たしているか仮説を建てた。

1-2-1. 位置確認-自分がどこにいるかを把握させる機能

位置確認は、視覚情報を基に利用者が自分の位置を認識する手助けをする役割である。この機能の効果は、視覚情報の配置や特性、情報量によって影響を受ける。特徴的な風景や特定の場所が映し出された間戸を、それが見える間戸だと認識できることで機能し、認知負荷の軽減や迷いの防止が期待でき、利用者の立場によってその効果は異なると考えられる。

1-2-2. 行動の節点-動と静を緩衝し、滞在を促す機能

行動の節点は、施設内の通路と滞在空間が交差する場所で、利用者の行動を促進し、立ち止まったり滞在したりすることを誘導する機能とする。間戸のデザインや周囲の環境が、利用者の行動に影響を与え、その効果を高めると考えられる。

1-2-3. 関係の間合いを作る-距離感を生み出す機能

関係の間合いづくりは、空間の視線透過性や物理的距離を調整し、内部の安心感と外部との接触のバランスを取る機能である。これにより、利用者間の適切な距離感を意図的に生み出し、一方的な視線の侵入を防ぎながら相互の気配を認知できるようにすると考えられる。

第 2 章 間戸の定義と役割・研究方法**2-1. 研究対象施設の概要****2-1-1. 扱う高齢者施設の種類の選定**

本研究の対象は、現地調査を行った 2 件に加え、「新建築データ」から選定した事例である。後者は建築用途「老人福祉施設」154 件のうち、「生活拠点」かつ「スタッフ常駐」を条件とし、主要用途が「有料老人ホーム」または「特別養護老人ホーム」であり、図面・画像から境界を判読可能な 3 件を抽出した。さらに、間戸のデザインに関する深い洞察を得た

め、特に優れた5件を加え、計10件を対象施設とした。

2-2. データ収集方法

2件の現地調査では、図面の収集、間戸周辺の画像収集、ヒアリングを行った。

2-2. 間戸の評価基準

間戸を「位置確認」「行動の節点」「関係の間合いづくり」の3軸を4段階(0点~3点)で評価を行う。

① A軸：位置確認

「位置確認(A軸)」は、間戸を通して見える外界の景色や対象物を情報源として、利用者が「自分が建物のどこにいるか」を認知することを助けるかについて評価する。

② B軸：行動の節点

「行動の節点(B軸)」は、間戸の周辺が、利用者の一連の動作を緩衝し、「通過」から「滞在」へと転換させる滞在场所として機能しているかを評価する。

③ C軸：関係の間合いづくり

「関係の間合いづくり(C軸)」は、間戸が異なる活動をする人々の間に適切な距離感を生み出し、同時に円滑なコミュニケーションを可能にする視覚的なつながりを保っているかを評価する。

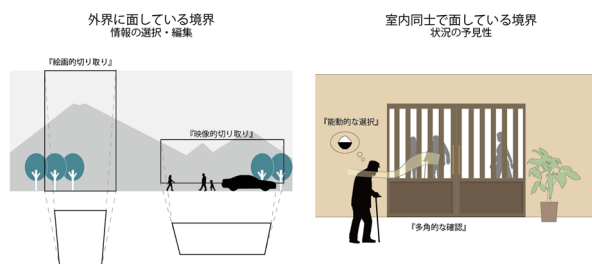
第3章 高齢者施設の実態調査

3-1. 収集した間戸データの一覧

本研究では、国内10件の高齢者施設を対象に、実地調査を含む手法で計39件の間戸データを収集した。本章では、これらの間戸を通して入居者や介護スタッフ、外部者がいかなる情報を受容し、その周辺でどのような生活行為が誘発されているかを明らかにすることを目的とする。収集したデータに基づき、5つの境界類型ごとに分析考察を行った。

3-2. 分析・考察・設計原則

本研究の分析考察を通じて、間戸の機能は境界の性質によって二極化することが明らかになった。



【図1: 情報の「選択・編集」と「状況の予見」の対比】

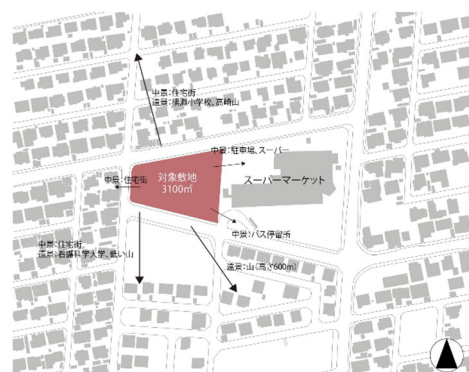
外界に対しては周辺環境の「選択・編集」が重要である。外部活動が近接する間戸9-1では、縦長窓により情報を「動的な絵画」として切り取ることで、直接的干渉を避けつつ好奇心を刺激する「静的な鑑賞」を誘発していた。こうした適切な情報の選別が、入居者の社会性や休息を支える鍵となる。また、室内同士に対しては「状況の予見性」が重要であり、先の状況を多角的に確認できる情報の透過性は、不安を払拭

し、能動的な移動や交流の選択を可能にする。一方で、滞在設備がない間戸2-10のように、単なる情報の透過だけでは行為に結びつかない実態も確認された。

第4章 間戸の設計原則を用いた設計提案

4-1. 設計概要

本提案は、老人ホーム・公民館・カフェを一体的に設計し、「間戸」を介して地域住民の出入りが常態化する交流拠点の実現を目指す。対象は、大分県大分市の住宅街に位置する約3000㎡の敷地である。北側に高崎山を望む豊かな景観を有し、東側にはスーパーマーケットが隣接する。入居者と地域住民の生活



圏が日常的に重なる立地特性を活かし、社会と緩やかに接続し続けられる環境を構築する。

【図2: 対象敷地】

4-2. 設計手法

本設計では、従来のようなゾーニングや動線配置から始める手法ではなく、「外部環境との接続点(間戸)」を起点とする設計手法を採用する。

第5章 おわりに

間戸は採光・換気のみならず、その状態を通じて入居者の意思を伝える非言語的な伝達手段となる。本研究では、視線・行為・心理を媒介するその役割を実証し、安心感と見守りやすさを両立する空間設計のあり方を提示した。これが次世代の高齢者施設設計における一助となることを期待する。

参考文献

- (1) 渡邊 昭彦, 滝沢 雄三: <日本建築学会計画系論文集>, 『特別養護老人ホームの活気・着着きの空間探索画像からみた視認 反応分析特別養護老人ホームの活気・着着きに関する研究その1』
- (2) 清家清 (1984): 『清家清のディテール: 間戸 まど 窓』, 彰国社.
- (3) 大翔会: <Green ガーデン南大分>, 『TAISYOKAI』, URL: https://minamioita.taisyokai.jp/?_gl=1%2A905onx%2A_ga%2AMTAwNTM2MTM2OC4xNzQ1MjE1OTc1%2A_ga_S8RGHJLL8%2AczE3NT100TUzMDkzbYkZzEkdDE3NT100TUzNjIkaJYwJGwJGgw
- (4) 大翔会: <Green ガーデン富士見ヶ丘>, 『TAISYOKAI』, URL: https://fujimigaoka.taisyokai.jp/?_gl=1%1347vo*_ga*MTAwNTM2MTM2OC4xNzQ1MjE1OTc1%2A_ga_S8RGHJLL8*cE3NT12NTA3ND1kbzckZzEkdDE3NT12NTA3ND1kaJYwJGwJGgw